

形容詞「いか(厳)し」の消長

——「いかめし」「いかめい」との関連から——

坂 詰 力 治

目次

はじめに

一、奈良・平安時代における「いかし」と「いかめし」

二、鎌倉時代における「いかし」と「いかめし」

三、室町時代における「いかい」「いかめし」「いかめい」
おわりに

はじめに

形容詞「いか(厳)し」は「いかめし」と類義語の関係にある。この語は用例は多くないが早く奈良時代に見え、「上代語の確例は終止形相当の形が体言を限定したり、助詞「の」を従えたりする形ばかりで、その限りシク活用とされるが、『いかづち(雷)』『いかしほ(塩)』の『いか』も同じ語であるから、この構成からは『ク』活用と考えることもできる」とされている。⁽¹⁾そして、平安時代にはほとんど用いられることがなく、替わって「いかめし」が用いられるようになる。この「いかめし」は平安時代にあつては特定の文献に集中して用いられるが、多くの文献からもその用例を見出

することができる。ところが、「いかめし」の使用状況は中世以降になると徐々に少なくなり、室町時代には「いかめい」と「いかめしい」の二語形が用いられてくるが、やがて「いかめい」は姿を消し、「いかめしい」が生き残っていく。一方、平安時代以降ほとんど用いられなくなった「いかし」は中世後期の室町時代頃から「いかい」「いかう」の形で復活し、連体修飾語や連用修飾語として頻用されるようになる。

本稿では、このような経緯を辿る形容詞「いかし」について、類義語「いかめし」「いかめい」との文法史ないしは語彙史的な関わりを考慮しながら、その消長を考察しようと思う。

一 奈良・平安時代における「いかし」と「いかめし」

「いかし」と「いかめし」のうち、奈良時代にあつては前述のように「いかし」が用いられ、「いかめし」はまだ用いられていない。平安時代になると「いかし」に替わって「いかめし」が新しく用いられるようになるが、平安時代の和文系の文学作品、二五作品によつて両語の使用状況を探ってみると、表1に示したような数値が得られる。⁽²⁾

表1から、「いかし」と「いかめし」との平安時代における現れ方の違いを明確に知ることができる。すなわち、奈良時代に用いられた「いかし」が二五作品のうち、中期の長編物語の『宇津保物語』（1例）と『源氏物語』（2例）の二作品につきのように現れるにすぎず、ほとんど用いられなくなつていたのである。

○かゝるほどに、東国より、宮古にかたきある人、むくゐせむとおもひて、四五百人の兵にて、人はなれたるところをもとむるに、この山をみしめて、おそろしげにいかきものども、ひと山にみちて、めに見ゆるとりけだ物、いろをもきはらずころしくへば、⁽³⁾（前田家本宇津保物語・俊蔭）

○すこしもうちまどろみ給ふ夢には、かの姫君とおぼしき人のいと清らにてある所にいきてとかく引きまさぐり、うつつにも似ず、猛くいかきひたぶる心出で来て、うちかなぐるなど見え給ふこと、度かさなりにけり。⁽⁴⁾（湖月抄本源

氏物語・葵⁽⁴⁾

○顔を見むとするに、昔ありけむ目も鼻もなかりける目鬼にやあらむと、むくつけきを、頼もしういかきさまを人に
見せむと思ひて、衣を引きぬがせむとすれば、うつぶして声立つばかり泣く。(同・手習)

これらの例はいずれもク活用の連体形として用いられており、奈良時代での「終止形相当の形が体言を修飾する」働きを継承しているものであるといえる。そしてその意味は「人の性状や行為に関して用い、他を威圧し、恐れさせるような荒々しいさま、剛胆なさまを表」し、第一義の「樹木の繁茂、世の繁栄、武器の鋭利、心情の篤実などの、いちだんと目立つさま。ひとときわ優れているさまに、畏敬の念を伴ってい」う意味は見られない⁽⁵⁾。

一方、「いかし」に替わつて現れた「いかめし」は表1が示すように、二五作品のうち、ほぼ半数の一四作品、すなわち竹取物語・宇津保物語・蜻蛉日記・落窪物語・源氏物語・篁物語・夜の寝覚・浜松中納言物語・更級日記・狭衣物語・栄花物語・大鏡・法華百座聞書抄・松浦宮物語に用いられている。これらからジャンルによる違いは認められないが、そのことは平安時代におけるこの語の使用状況をよく示している。

表1

	いかし	いかめし
竹取物語	0	1
伊勢物語	0	0
土佐日記	0	0
大和物語	0	0
多武峯少将物語	0	0
宇津保物語	1	80
蜻蛉日記	0	1
平中物語	0	0
落窪物語	0	10
枕草子	0	0
源氏物語	2	76
和泉式部日記	0	0
篁物語	0	1
紫式部日記	0	0
堤中納言物語	0	0
夜の寝覚	0	1
浜松中納言物語	0	2
更級日記	0	1
狭衣物語	0	2
栄花物語	0	15
大鏡	0	2
讃岐典侍日記	0	0
法華百座聞書抄	0	1
古本説話集	0	0
松浦宮物語	0	3

平安時代に隆盛を極めた「いかめし」のその意味と用法については、すでに遠藤好英氏が詳細に検討しておられるので、ここではその成果に基づいて遠藤氏が対象とされていない文学作品の意味と用法を確認するにとどめることにする。遠藤氏は平安時代にあつて一度に花開いた感を呈する『宇津保物語』に見える「いかめし」の全用例（八〇例）について、何を「いかめし」と表現しているか、その対象となる事柄を（1）人間（2）人事（3）建物（4）自然（5）その他 の五つに整理し、それぞれについての特徴的な点を明らかにしている。そしてほぼ同じぐらいの多い用例数を有する『源氏物語』の「いかめし」の用例（七六例）を検討して『宇津保物語』の用法と比較し、さらに平安時代末期の『今昔物語集』における「いかめし」の全用例についても検討して、考察の結果を「『宇津保物語』から『源氏物語』へと多様化の道を辿った『いかめし』の意味・用法」は、『今昔物語集』をはじめ、軍記物語など中世の資料では次第に狭くなり、固定化するのである」とされている。

すなわち、『宇津保物語』において「いかめし」の表現の対象とする（1）の人間についての特徴的なことは、「人に恐ろしさや畏怖心を抱かせることをさ」し、「力が表面に現れて視覚的に捉えられる形となり、それが与える『恐ろしさ』の心情であり」（2）の人事については、「祓・前駆・参詣・経供養・神楽」「産養の祝いや大饗、相撲節会、非時、祝宴、馳走」など、儀式や設備などについて「作法に則り、きちんと立派であり、堂々としている」さまを表現し、（3）の建物については、「反橋・釣殿・宮・大殿・堂・産屋・蔵寢殿」など、「力が背景に感じられる宏壮な屋敷」で「畏怖感を与える」ものであり、（4）の自然物については、「河・楊・梅・栗・杉の木・木の陰」など、「大きいこと」や「恐怖の心を抱かせる」ものや、「馬・黄牛・牝猿・めぐまおぐま」など、動物の場合も「大きな凶体」を表すのに用いられることである。そして、『宇津保物語』の全用例から「いかめし」は結局「作法に叶い、堂々として立派で力や権威に対する畏怖感を含む性質をさ」し、「人・人事、建物の外観、自然に対しても使われるが、形の大きいこと、数の多さに関係する場合が多い」ということである。

この『宇津保物語』における「いかめし」の意味と用法は『源氏物語』になるといささか異なった様相を呈してくるという。まず、用法上から、『源氏物語』においては次の二つの特色が指摘できるという。一つは「いかめし」の連体形の使用が多くなり、被修飾語に「事」「わざ」などの形式名詞を伴い、「いかめし」が「抽象的観念として捉えられている」ということ、二つには、「連用形の副詞として働く場合で、被修飾語に形容詞が来る例がある」ということであり、これら二つの用法は『宇津保物語』にはほとんど見えない形であるという。そして「いかめし」の表現の対象も『源氏物語』では、人事に関しては「視覚にも強く訴える性格」や「評価に関してマイナスになる」ものも表し、自然に関しては花や風や波などに対しても用いられ、「いかめし」の表現対象の広がりが『宇津保物語』との間に差を生じているという。このように『源氏物語』では「いかめし」は「威勢や力を背景とした強い印象を内容としながらも、視覚や聴覚にもまたがつて用い、修飾の範囲を広げているのが見てとれる」ということなのである。

こうした『源氏物語』の傾向は平安末期の『今昔物語集』に見える「いかめし」の用例について考えるとさらに一層進展するかというところではなく、むしろ『今昔物語集』の全用例(二六例)について活用形と何を修飾するかを検討し、その結果を『源氏物語』の場合と比較してみると、次の四点に差が見えてくるという。

- すなはち、『今昔物語集』は「いかめし」の被修飾語に関して、
 - 1 産養や大饗などの儀式が見当たらない。
 - 2 形式名詞の事・咎も見られない。
 - 3 「いかめし」が述格に立つ時の主語には、
 - 御願・画風、花房、風の吹きざまもない。
 - 4 勢の場合だけが多くなっている。

ということである。

こうした事実から、『今昔物語集』では「いかめし」の意味・用法は『源氏物語』より狭く、固定化の方向を示しているという。

そこで、平安時代の和文作品二五のうち、「いかめし」が用いられている『宇津保物語』と『源氏物語』を除いた『竹取物語』から『松浦宮物語』までの一二作品における「いかめし」の意味・用法について、活用形と何があるいは何を「いかめしい」と表現しているか(その内容を括弧で示す)を整理し、右に示した遠藤氏の考察結果に照らし確認することにする。

(1) 連用修飾語としての用法

- (あるじ||饗応) いかめしう仕うまつる(『竹取』) ○(一条の太政大臣の加茂神社参詣のさま) いかめしうのゝしる(『蜻蛉』) ○(結婚の祝宴の準備) いかめしうし給ふ(『落窪』) ○(御調度) いかめしうしかへて(『同』) ○(法要) いかめしうしはて給ふ(『同』) ○(精進落ち) いかめしうし給ひて(『同』) ○(賀の事) いかめしうし給へど(『同』) ○(葬式) 供養など) いかめしうし給ひける(『同』) ○(三の君) いかめしうて(筆者注、「して」カ) 待ち給ふ(『篁』) ○(寝殿・廊など) いかめしう造りひろげ給ひしかば(『寝覚』) ○(文を作りあそび給ふさま) いかめしくおもしろし(『浜松』) ○(関白殿の姫君) いかめしうのゝしりて(『同』) ○(関寺) いかめしう造られたるを(『更級』) ○(二條殿) いかめしう猛におぼし掟てたりつれば(『榮花』) ○(中台尊||大日如来) 厳しくましまして(『同』) ○(四天王) いかめしくしてたゝせ給へり(『同』) ○(仏) 厳しくおはします(『同』) ○(中台尊) いかめしうおはします(『同』) ○(御堂万燈会) いかめしうめでたし(『同』) ○(御法事) いかめしうせさせ給て(『同』) ○(布施) いかめしうせさせ給へり(『同』) ○(法隆寺) いかめしうをき(掟) てさせたまへる(『大鏡』)

(2) 述格に立つ用法(その時の主格に立つ語を示す)

○檜皮の棧敷〔落窪〕 例の人（＝大将）〔同〕 ○法事の詣行事〔栄花〕 ○公私ごと〔同〕 ○僧俗〔同〕
○御座します程の有様〔同〕 ○かの寺（＝山階寺）〔大鏡〕 ○つは物（＝兵）〔松浦宮〕 ○（燕王の）おのが
かたち〔同〕

（3）連体修飾語としての用法（その被修飾語を示す）

○御堂〔狭衣〕 ○寺〔同〕 ○男〔栄花〕 ○事〈形式名詞〉〔同〕 ○男君〔同〕 ○大威徳の龍王の形〔法
華百座〕 ○舟のさま〔松浦宮〕

『宇津保物語』と『源氏物語』との二作品に多用されている「いかめし」が平安時代の他の和文の作品にどの程度用
いられ、その意味と用法に変化が見られるかどうかという観点から、作品ごとに検討してきた。その結果、使用頻度と
いうことからは『宇津保物語』『源氏物語』以外では『落窪物語』と『栄花物語』の二作品にそれぞれ一〇例、一五例と
いうように些か使用数の多さが認められるものの、他は一、二例にすぎないことから作品ごとの用法を明らかにするこ
とはできない。全体的には広く人事についての事柄に関する表現が目立つてはいるが、『宇津保物語』『源氏物語』の用
法の域を出ていないといえよう。

二 鎌倉時代における「いかし」と「いかめし」

平安時代にほとんど用いられなくなった「いかし」は、鎌倉時代には表2から窺えるように、ほぼ完全に姿を消して
いると言つてよいであろう。ここでは鎌倉時代の文学作品、二〇作品という限定はあるものの、「いかし」の奈良時代か
ら平安時代への使用状況の推移に連関する結果を示しているものと思われる。そのような中であつて、『宇治拾遺物語』
に見られる「いかし」の次の一例はどのように考えたらいいであろうか。

○汝が、その経書奉るとて、魚をもくひ、女にもふれて、清まはる事もなくて、心をば女のもとに置きて、書奉りた

れば、其功德のかなはずして、かくいかう武き身に生れて、なんぢをねたがりて、(巻八ノ四 敏行朝臣事)

この文章の内容は、人々に請われて法華經を二百部ほど書き奉った敏行という歌よみが潔齋することもなく、ただ上空で法華經を書き奉ったので、その功德もかなわず、こういう「いかう武き身に生れ」たというものである。ここで「いかう」は「いかく」のウ音便形であり、その意味は「荒々しい、恐ろしい」と考えられるところであるが、平安時代にわずかに用いられた「いかし」の用例から鑑み、室町時代に多用されてくる「いかし」の連用形「いかく」のウ音便形「いかう」の副詞的用法、すなわちその動作や状(情)態の程度の甚だしいさまを表す用法のさきがけの例と考えられなくもない。

なお、『宇治拾遺物語』には「いかし」に替わって平安時代以降用いられるようになった「いかめし」が三例見られる。一例は

○甲斐のすまひ(相撲)、大井光遠は、ひきふとにいかめしく、力つよく、足はやく、みめことがらよりはじめて、いみじかりし相撲なり。(巻二三ノ六 大井光遠妹強力事)

のように、主格(ここでは大井光遠)の述格として、その体つきが「いかめし」(がっしりしている)と言ひ表したものであり、他の二例は

○しらく高き築地を、遠くつきまはして、門をいかめしく立てたり。(巻六ノ九 僧伽多行羅刹国事)

○博打一人……いかめしくおそろしげなる声にて、天の下の顔よしとよぶ。(巻九ノ八 博打掣入の事)

のように、連用形として、対象となる門を「立てたり」する様を修飾したり、博打の呼ぶ声に対して「いかめしくおそろしげ」なさまでであると表現している。

奈良時代に用いられた「いかし」に替わって、平安時代の『宇津保物語』と『源氏物語』を中心として多用された「いかめし」も鎌倉時代においては表2に示したように、二〇文学作品のうち、わずかに四作品に九例しか見られない。し

かし、このことは必ずしも「いかめし」がやがて用いられなくなっていくことを意味するものではない。なぜなら、南北朝時代頃に成立した歴史物語としての『増鏡』には「いかめし」が一七例も用いられているからである。すなわち、表2に表されている「いかめし」の使用の実態は大きく表現素材に関わっているように思われる。

表2

	いかめし	いかし
高倉院殿島御幸道記	0	0
高倉院升霞記	0	0
無名草子	0	0
閑居友	0	0
方丈記	0	0
たまきはる	0	0
建礼門院右京大夫集	0	0
保元物語	0	3
平治物語	0	0
平家物語	0	0
宇治拾遺物語	1	3
海道記	0	0
竹むきが記	0	0
東関紀行	0	0
十訓抄	0	2
十六夜日記	0	0
沙石集	0	0
うたたね	0	0
中務内侍日記	0	0
徒然草	0	1

そこで以下、「いかめし」の用いられている鎌倉時代の文学作品、すなわち保元物語・宇治拾遺物語・十訓抄・徒然草の四作品における「いかめし」の意味と用法について検討する。(『宇治拾遺物語』の「いかめし」については既に触れた) まず、『保元物語』に用いられている「いかめし」は三例である。すなわち、

○其殿(守殿すなわち清盛)の弓勢いかめしくいふとも、(中 白河殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事)

の一例は、「いかめしくいふとも」とあるが、文脈上「いかめしといふとも」とありたいところで、諸本にはそのような本文を取るものがあることから、「いかめし」を終止形ととって主格「弓勢」の述格と解することにする。他の二例のうち、一例は

○かやうに事がらいかめしきのみにあらず。(上 新院御所各門々固めの事付けたり軍評定の事)
のように、主格「こと柄」の述格として準体言「のみ」に掛かる用法であり、一例は

○あないかめしの御事候や。(中 白河殿攻め落す事)

のように、感動表現における語幹の用法としてのものである。

『十訓抄』に見られる二例は、

○ヨソホヒイカメシウシテ住ケル程ニ、(上 第一不施人惠事)

○広クイカメシク人モカヨハヌ所ニテ、(下 第七可専思慮事)

のように、連用修飾語として城に住んでいる様子と述格として住んでいる所のさまをそれぞれ表している。

『徒然草』の一例は、

○(資季) 大納言入道、負になりて、所課いかめしくせられたりけるとぞ。(第三百三十五段)

のように、連用修飾語として「所課」課せられること、すなわちここでは(罰として)供御を設けること「いかめしく(おおがかりに)」「したと言っている。

これらからは、鎌倉時代における「いかめし」の意味・用法の特徴は見出せない。

三 室町時代における「いかい」「いかめし」「いかめい」

古代語から近代語への過渡的時期にあたる室町時代には、活用における連体形の終止形統合作用という現象が起きてくる。そのため、形容詞においても古代語の連体形語尾の「ー(し)き」がイ音便化した「ー(し)い」がそのままの形で終止形にも用いられるようになる。この時代には、奈良時代に用いられ平安時代以降用いられなくなる「いかし」が「いかい」という形で復活し、「いかめし」が「いかめい」「いかめしい」というふうに変化している。

そこで、以下、「いかし」「いかめし」がそれぞれに変化した語形が室町時代における諸文献にどのような形で用いられているかを検討する。

室町時代における口語資料一二文献と文語資料六文献との計一八文献に見られる「いかい」「いかめい」「いかめし」は表3のとおりである。

この表から分かることは、まず平安時代以降影を潜めてほとんど文献に現れることになかった「いかし」が口語の世界において「いかい」の形で復活しているということである。文献ごとに使用数の偏りが顕著に現れてはいるが、文語資料には全く用いられていないことから、当時の口語として定着していたものといえる。しかも「いかい」は、次のように、ウ音便「いかう」の形で副詞的用法（「たいそう・ひどく・はなはだしく」の意の程度を表す）をとるものと連体形「いはい」で連体修飾語の用法をとるものとの二つにほぼ限定される。「いかう」と「いはい」の使用分布は表4のようになる。

表3

	いかい	いかめい	いかめし
虎明本狂言	49	0	4
論語抄	2	0	0
杜詩抄	0	21	14
漢書抄	18	15	4
古文真宝桂林抄	3	1	5
山谷抄	13	8	0
荘子抄	15	1	1
百丈清規抄	1	16	4
日本書紀兼俱抄	2	0	0
日本書紀桃源抄	1	1	0
天草本平家物語	0	0	0
天草本エソポ物語	1	0	0
車屋本謡曲	0	0	0
曾我物語	0	0	0
増鏡	0	0	17
義経記	0	0	1
サントスの御作業	0	0	0
ドチリナ・ キリシタン	0	0	0

表4

	いかう	いはい
虎明本狂言	29	20
論語抄	2	0
漢書抄	6	13
古文真宝桂林抄	1	2
山谷抄	4	9
荘子抄	2	13
百丈清規抄	0	1
日本書紀兼俱抄	0	2
日本書紀桃源抄	0	1
エソポ物語	1	0

「いかう」が用いられている七文献から一例ずつ用例を示す。

○此間はいかうほねをおつたに、(『虎明本狂言』三本の柱)

○大学ノ八条目イカウ子游カ難ジタゾ (『論語抄』子張第十九)

○藝文志ニハ楚人ト云タホドニ齋趙ハイカウチガウタホドニ、(『漢書抄』卷三三五ウ)

○氣一ハイカウ大ナル心ゾ (『古文真宝桂林抄』乾15オ)

○一旦ハ氣ニチガウタガ後ニハイカウ信ゼラレタゾ (『山谷抄』一88ウ)

○歌ウタフキケンモ有マイト思ヘバイカウ打拳テウタウヨ (『莊子抄』二18オ)

○ある鳥、とつと肥えた鳩を見て、いかう (yco) 羨ましく思うて、(『エソボ物語』鳥と鳩の事)⁽⁹⁾

「いかう」が用いられている七文献の全用例のうち、副詞的用法として程度を表しているものがほとんどであるが、『漢書抄』にわずかに一例ではあるが、次のような連用中止法として用いられたかと思われる例がある。

○流行坎止トテ流レハイカウアナノヤウナ処ニ逢ハ止ラウゾ (卷一42ウ)

連体修飾語としての「いかい」は、それを受ける被修飾語の内容が「事物の形態・規模が大きくて、人に威圧感を感じさせるさまである」ことを表したり、「そのものから発動される勢いが、並外れて甚だしいさまである」ことを表したり、「事態の程度や数量が一般の基準に外れていて、普通より甚だしく度が過ぎて意を強調している」⁽¹⁰⁾の用に用いられる。「いかい」の被修飾語に立つ具体例を文献ごとに示す。

『虎明本狂言』の場合

事〈形式名詞〉	満足	けでん(怪顛)	さむ(寒)さ	ゐなし(居成 家構えノ意)	御はらだち(腹立)
手がら(柄)	目	人	ぶげんしゃ(分限者)	顔	ちがひ(違)

これらのうち、形式名詞「事」と結合して用いられた「いかいこと」については、

○やれ／＼いかひ事をなげだひた、まづとがしめ(宗論)

のように、それ全体で「事態が一般の基準に外れていて、甚だしく度が過ぎていること」の意味を表すものとして用いられている。この種の用例は他の文献にわたって多く見られる。

なお、次のような例は用法的には連用修飾語「いかう」が用いられるところであろうが、現代語において「凄く寒かった」を「凄く寒かった」という言い方をする場合があるが、それに通ずるものであろうか。ただし、ここでは漢語に断定の助動詞が接したものにしかかかっていることに注意する必要がある。

○ようにたとう人じやといふて、いかひ満足じやと言たらはよからふ程に(秀句傘)

『漢書抄』の場合

事・モノ(物、者)〈形式名詞〉

大臣 大義ノ事 名望 チガヒ(違)

知音

『古文真宝抄』の場合

モノ〈形式名詞〉 隠居処

『山谷抄』の場合

サキ(先)ノ事 楽(ラク) ワツラヒ(煩) 者 毒 功 知者 鳥 広さ

この抄にも次のような副詞的に用いられた「いかい」の例を認めることができる。

○内裡カラ休沐ノ暇ヲ賜テ宿ニイルガイカイ楽デアルニ(一82ウ)

『莊子抄』の場合

事・者(物)〈形式名詞〉 大蛇 人 魚 体 チガヒ(違)

『百丈清規抄』の場合

ブンゲン(分限)

形容詞「いか(蔽)し」の消長

『日本書紀兼俱抄』の場合

事〈形式名詞〉 吉事

『日本書紀桃源抄』の場合

脚口(答檀)

次に、「いかめし」について検討する。

室町時代には「いかめし」も「いかし」と同様に、「いかめい」という口語形を生ずることになる。しかし、シク活用としての本来の「いかめし(い)」も同時に広く用いられている。そこで、この両語には用法の違いがあるのかどうかを、形態と意味とから探ることにする。

まず、「いかめい」について、各文献における活用形の現れ方を見ると、表5のようになる。

表5

	いかめ	いかめから	いかめう	いかめい	いかめけれ
虎明本狂言	2	0	0	0	0
杜詩抄	1	1	4	15	0
漢書抄	1	0	2	12	0
古文真宝抄	0	0	0	1	0
山谷抄	0	0	0	8	0
荘子抄	0	0	0	1	0
百丈清規抄	1	0	0	13	2

「いかめい」は、「事物の形態が異常に強大であり、すぐれていることを意味する語として、用法は限定されており、連体修飾語に立つ用例が多数を占めている」⁽¹⁾といわれる語であるが、そのことは表5からも裏付けられる。しかし、「いかい」と同様、ウ音便形「いかめう」が用いられているほか、語幹の用法が見られたり、未然形や已然形の例なども見られ、その使用は用例数こそ多くはないが、広く各活用形に及んでいることを無視することはできない。

語幹の用例は、「いかめの鬼」(『虎明本狂言』鬪罪人・清水)のほかは「いかめい」も「アラ」「ヤラ」「ア、」という感嘆詞に接続したもので、現代語での「ああ、痛(いた)！」という表現と同じものである。未然形と已然形の用例は『杜詩抄』と『百丈清規抄』とに、次のように見られる。

○見ルニ汝(ヲ)氣概ハイカメカラン(『杜詩抄』十九5ウ)

○華嚴ハ功德ハイカメケレドモ二乗声聞ハ如然如亞テ不知ゾ(『百丈清規抄』一30ウ)

○法華モ圓教デイカメケレドモ華嚴ニハヲトリタゾ(同)

「いかめい」はシク活用「いかめし」のク活用化した室町時代の口語ではあるが、文語と口語とが混在する抄物文献の中にあつてはこのように文語的表現をとつて用いられるのである。そして「いかめい」の表す意味は「いかめし」と同じであり、「いかめい」の見られる六文献における「いかめい」の主格に立つ語と被連体修飾語に立つ語は人物(の評

表6

	いかめしけれ	いかめしかる	いかめしい	いかめし	いかめしう	いかめしかつ	いかめしから
虎明本狂言	0	0	0	1	1	0	0
杜詞抄	1	1	5	1	1	2	3
漢書抄	0	0	0	2	2	0	0
古文真宝桂林抄	0	0	4	1	0	0	0
莊子抄	0	0	1	0	0	0	0
百丈清規抄	0	0	1	1	2	0	0

価)、人事(官位・志・心・尊宿・所領・大富人・儒者・諡・王孫)、能力(智・才・才格・大才)、植物(桃の実・木・芋茎)、動物(黄魚・鶴)、地形(山)や場所、建物(橋・塔)、事(形式名詞)・事柄などであつて、「いかい」と同様に多岐に亘っている。ところで、平安時代以降用いられているシク活用「いかめし」は室町時代には活用の連体形の終止形統合作用によつて、終止・連体形に「いかめしい」の語形をとるようになる。その結果、各文献に現れる「いかめし」の活用形は文献による違いはあるものの、表6に示したように多様である。

「いかめし」は文語の流れを汲むものとして考えるとき、表3の下段に示した文語資料に現れるのは当然のことであろう。しかし、平安時代に盛行した「いかめし」ではあつても、すでにこの語の用いられ方はそれぞれの文献の内容に大きく関わっているのである。その結果、表1から窺えるように、「いかめし」の現れる数値は文献によつて著しい差異を生じているのである。「宇津保物語」と「源氏物語」とに集中して用いられていた「いかめし」は平安時代後期、鎌倉時代に降

るにしたがつてその使用数を大きく減じていくが、その中であつて、歴史物語の『栄花物語』と説話集の『今昔物語集』には多く用いられている。そのようなことから見ると、室町時代の文語資料のうち、『源氏物語』『栄花物語』などの影響を強く受けていると言われる歴史物語の『増鏡』に「いかめし」が数多く用いられているのも理解できるのである。

このように、文献の素材内容によつて大きくその使用が左右される「いかめし」が、室町時代にあつては、口語資料とされる文献にも「いかめい」とともに用いられてくるのである。

それでは、「いかめし」の活用形の実態と何を「いかめし」と表現しているか、その対象について文献ごとに検討する。命令形を除く他の活用形が一通り見られるのは『杜詩抄』だけであつて、他の文献では連用形、終止・連体形の「いかめし」と「いかめし(い)」に集中している。この現象は「いかめい」の場合もほぼ同様であつた。終止形「いかめし」の五文献六例のうち、感嘆詞「ヤラ」「アラ」と結びついた語幹の用法が二例見られる。また、「いかめしい」のうち、述格に立つ用法をとつたものは四文献一一例中、

○諡ハイカメシイゾ〔古文真宝抄〕乾73オ)

○イカニ人ガ面目ヲ失ト云トモ失トモ不思又イカメシイト云トモ心ニスシナイ事ト思ゾ〔庄子抄〕一14オ)

○勲勞ガイカメシイホドニ魯ヲ采邑ニシテ〔百丈清規抄〕一39ウ)

の三例であり、他は連体修飾語としての用法である。「いかめしい」の被修飾語になつているのは「大官贈号、大官人、儒者、者、人、様」などで、その意味は先の「いかい」と同様、「事物の形態・規模などが壮大で、その物としての体裁が立派に整つてゐるさまである」ことを表したり、「事物の性質などが普通一般と違つていて、価値や程度の高いすばらしいものである」ことを表したり、「事物の状態が普通一般の基準をはるかに超えた程度である」ことを表している。⁽¹²⁾

「いかめし」の口語形「いかめい」を有しながら、室町時代の口語資料において「いかめし(い)」をともに用いてゐるのは大体抄物資料に限られてゐる。それは抄物の文体が口語と文語の混合体を成しているからであると考えられる。

そして、両語がほぼ同じ用法と意味とを担いながら、平安時代以降姿を消した「いかし」が室町時代に再び語形を変えて復活した「いかい(う)」「いかめい」を巻き込んで、「いかい(う)」「いかめい」は専ら口語の世界において用いられ、⁽¹³⁾「いかめし」は文語の世界において用いられるということであつたと思われる。

おわりに

奈良時代において用いられた形容詞「いか(敷)し」が、平安時代に「いかめし」にとつて替わられ、鎌倉時代にあつてもほとんどその姿を見せることがなかつたが、室町時代になつて口語の世界に「いかい」「いかう」の形で復活する過程を、「いかめし」と「いかめい」との関わりから見てきた。

平安時代に「いかめし」が「いかし」にとつて替わることになつた経緯や「いかし」が室町時代に「いかい」「いかう」という形で再び用いられるようになった経緯などについては明らかにすることができなかったが、これらの語が各時代においていかなる文献にどのように用いられてきたかの過程を辿ることはできた。その結果、「いかし」から生まれ変わった「いかい(う)」は「いかし」本来の意味・用法すなわち「人の性状や行為に関して用い、他を威圧し、恐れさせるような荒々しいさま、豪胆なさまを表す」⁽¹⁴⁾ことをほとんど放棄して、連体修飾語、連用修飾語として「程度の甚だしいさま」や「具体的な物の大きさ・長さ・量の多さ」を表現するのに用いられること、一方、平安時代に「いかし」にとつて替わつた「いかめし」は、平安末期以降次第にその使用が衰退していくが、室町時代になつて、一つは活用における連体形化した「いかめい」の語形で口語の世界で用いられ、「いかい(う)」と共存することになり、一つは活用における連体形の終止形統合作用という現象から「いかめしい」という語形が現れ、平安時代の意味・用法を引きずりながら文語の世界において用いられていることが明らかにされた。

室町時代において「いかい(う)」「いかめい」「いかめし(い)」は言文二途の場において、表3に示したような用いら

れ方をするのであるが、そのうち、言すなわち口語の「いかい」と「いかめい」は「連用修飾語として用いられる点で音便形『いかう』が『いかめう』よりやや多いという相違はあるが、共に連体修飾語に多用され、抄物などの実例においては」⁽¹⁵⁾「意義上ほとんど区別されていなかったようである。そして、「いかめい」と「いかめし」では「いかめい」が連体修飾語に立つ用例が多いのに対し、「いかめし」は連用修飾語に立つ用例が多く、両語の意味の区別はほとんど認められないということである。

なお、両語のうち「いかめい」は江戸時代にかけて衰退していくが、そのことについては工藤力男氏の詳細な論考がある。⁽¹⁶⁾

注

- (1) 中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤義編『角川古語大辞典第一巻』の「いかし」の項に拠る。
- (2) 拙論「しばらく(暫く)考——「しはし」との比較から」(『文学論藻』第六十八号、平成六年二月)に倣う。
- (3) 宇津保物語研究会編『宇津保物語 本文と索引(本文編)』に拠る。
- (4) 吉沢義則著『対校源氏物語新釈 卷一』に拠る。
- (5) 注(一)文献に同じ。
- (6) 佐藤喜代治編『語誌I(講座日本語の語彙9)』の「いかめし」の項(頁36〜41)
- (7) 『今昔物語集』に見える同話では、この部分「唄ノ高キ身ト生レテ」とある。
- (8) 平安時代に『宇津保物語』に一例、『源氏物語』に二例とわずかに用いられた「いかし」はいずれも連体修飾語としてのものであって、連用修飾語としての用法はない。「いかし」が連用形「いかく」のウ音便形をとって一般に用いられるようになるのは室町時代になってからであり、それも程度の甚だしいさまを表す副詞的用法である。
- (9) 原文はローマ字表記。いま、漢字仮名交じりに改める。

(10) 室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典 室町時代編一』の「いかい」の項に拠る。

(11) 注(10) 文献「いかめい」の項の〈参考〉に拠る。

(12) 注(10) 文献「いかめい」の項に拠る。

(13) 注(10) 文献「いかい」の項の〈参考〉に拠る。

なおここでは、抄物において「いかい」と「いかめい」とに意義上の区別がされていない例として、

○百乗―イカイ事ゾ。車一両二甲十三人、歩卒七十二人、牛三疋、馬四疋ツツガルホドニ、百乗ハイカメイ事ゾ。(『史記抄』十)

○イカイ險難ゾ。天下險難ゾ。天下險難イカメシイト云心ゾ。天下ノ水ガ流ルレドモ盈タヌゾ。イカメイ深谷ゾ。(『周易抄』三)

の二例を掲げているが、『漢書抄』にも「いかい」と「いかめい」とには意義上の区別を示していないと思われる例が、次のように見える。

○百ト十トハナニガ文ノカハリマデハアルベキゾイカイチガイゾ (巻四10ウ)

○百ト千トハナニガ文ノカハリバカリデハアルベキゾイカメイチガイゾ (巻四12ウ)

(14) 注(1) 文献に同じ。

(15) 注(10) 文献「いかい」の項の〈参考〉に拠る。

(16) 「中世形容詞の終焉」(『論集日本文学・日本文学』3 中世)所収、後に『日本語史の諸相 工藤力男論考選』に転載)

付記

本稿で調査対象とした文献の用例数は、『古典対照語い表』(宮島達夫氏編)で扱われているものについてはそれを利用して、それ以外のものについては文献ごとの索引を利用した。また、取りあげた用例の出典は、日本古典文学大系本に収められているものについてはその本文に拠った。ただし、虎明本狂言は『大藏虎明本狂言集の研究』(本文篇上・中・下)、抄物は論語抄(『論語抄の国語学的研究』〈影印篇〉)を利用)以外は『抄物資料集成』に拠った。エソポ物語は『エソポのハプラス 本文と総索引』

に拠った。

なお、用例の表記にあたっては原文のかなを漢字に直したり、濁音符を付したりしたものがある。